

横浜訓盲学院

研究協力校（課程又は障害種）

- ・横浜訓盲学院（視覚）

研究の成果

観点 1：

各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

1-1. パーキンス盲学校との連携

研究協力校は米国のパーキンス盲学校と連携協定を結び、研究を進めている。パーキンス盲学校はアメリカで最も古い盲学校であり、米国で最初に盲ろう教育を行った学校である。ヘレン・ケラーの家庭教師であったアン・サリバンも同校で学んだという歴史ある学校である。現在も約 50 名の盲ろう幼児・児童・生徒が学んでおり、世界で最も多くの盲ろう児を最も長く教育し続けている。研究協力校との関係は 90 年前から続いており、パーキンス盲学校からの実践知の共有は従来よりなされていた。

本研究においては、盲ろう幼児児童生徒が多く在籍する横浜訓盲学院をフィールドとし、パーキンス盲学校国際支援部門パーキンス・インターナショナル(以下、PI)の協力を得て、パーキンス盲学校が開発したアセスメント・ツールを実際に用いてその有効性および制約を確かめ、我が国の盲ろう教育に資することを目的とする。

1-2. 教員間での共通理解・合意形成の方法

研究協力校の教員は 4 つのグループに分かれており（幼稚部から小学部 3 年生までの「幼小グループ」、小学 4～6 年生の「小学部」、「中学・高等部」、「高等部専攻科生活科」）、各グループで週に 1～2 回、ミーティングを行っている。また、毎週水曜日に、管理職と各グループ主任で、主任会議を開き、生徒状況などの情報を共有し、それぞれのグループでも情報を共有している。

観点 2 :

教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2-1. 盲ろう児のアセスメント

盲ろうの子どもたちは視覚と聴覚の両方に障害を有するため、基本的な人間関係の形成、感情の交流、コミュニケーション方法の獲得、概念の形成、出来事の全体像や因果関係の理解などが非常に困難になる。盲ろうの幼児児童生徒の自立活動を進める際、盲ろうという障害に配慮したアセスメントが必要である。研究協力校が米国及び欧州の文献等を調査した結果、盲ろう児のアセスメントには標準化されたものがないことが確認された。パーキンス盲学校においても標準化されたものではなく、いくつかの環境条件下で盲ろう児の行動を観察し、コミュニケーションのパートナーとして評価者が関与する方法が取られている。その理由としては、盲ろう児は視覚と聴覚の情報が限られており、評価者が意図して提示する物や人に注意を向けること自体が困難であることが挙げられる。かわりに、子どもが安心して、今、関心を示していること、現に行っていることに評価者が導かれ、かかわりを展開することが盲ろう児の実態把握への効果的な取り組みとされている。これは「子どもに先導されるアセスメント (Child-Directed Assessment)」と称される。

評価者はかかわる際にいくつかの視点を持っており、表1に一例を挙げる。

表1 コミュニケーションを評価する際の評価者の視点

- コミュニケーションの形態（体の部分を触るタッチ・キュー、実物、シンボル、絵、身振り、手話、スピーチ、文字、点字等）
- 機能（要求、拒否、名づけ、報告等）
- 社会的交流（愛着関係、やりとりを自ら始められるか、共同注意の発現およびその維持、役割交代等）
- 他者への意識（自分以外の他者が近くにいるか、何をしているかわかるか、関心を持つか、他者の感情に気付いているか、自らの感情が他者におよぼす影響に気付いているか等）

ことばやサインに関しては、教えるのではなく、会話をするという方向性が根底にはある。ことばやサインを盲ろう児が獲得するためには細やかな工夫が必要であることを知ること自体が、盲ろう児の困難とは何か、盲ろう児の豊かな暮らしに必要なコミュニケーションとは何かを教員に教えてくれることとなる。

2-2. 盲ろう児の教育活動の方針

盲ろう児の教育活動の組み立ての方針を表2に挙げる。

表2 盲ろう児の教育活動の組み立ての方針

1. 盲ろう児にかかわる人及び出来事の一貫性
2. ルーチンの有効性
3. 子どもの興味関心に従い授業を組み立てる。
4. 選択できる機会を用意する。
5. 授業では本物を使って、子どもにとって意味のある活動を行う。
6. 自立を奨励する。
7. 家族とパートナーになる。

全ての活動において、教員が盲ろう児に触れる・触れられることが不可欠であり、盲ろう児にどう触れるかについて学ぶことが教員には必要となる。

2-3. 個別の指導計画の作成と評価

個別支援計画及び、個別指導計画を年度始めに作成し、個別指導計画においては、半期ごとに見直しを実施し、課題の達成状況について評価を含めて確認をしている。

年度末には、総合評価を行い、次年度の個別支援計画と取り組む課題を明確化し、支援の在り方を検討し引継いでいる。また、個別支援計画は年3回、保護者との面談、課題の達成状況の確認・見直しを行い、総合評価を行っている。

観点3:

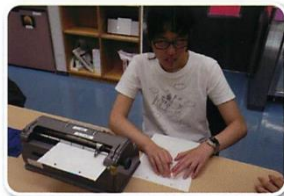
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3-1. 個に合わせた支援

研究協力校では、コミュニケーションの多様性を重視している(資料1)。資料1のように、iPadを用いた写真コミュニケーションや、点字タイプライター「パーキンスプレーラー」を用いた作文などを行っている。



お話ができなくてもトーキングエイドがあれば
お買い物も一人ができる



パーキンスプレーラーで打ち込んだ文章を読む



点字の作文はパーキンスプレーラーを使って



オブジェクトキュー(実物)の日課表



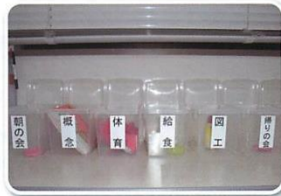
オブジェクトキューを持って次の活動へ



VOCAをたたくと音声のメッセージが出ます



実物を貼れば日記も書けます



カレンダーボックス



拡大読書器を使う練習



iPadで広がる写真コミュニケーションの世界



先生の身振りサインを触って読みます



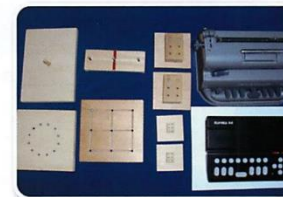
点字の「読み」にいたるステップ



文字の書きやすい工夫



手話には豊かな語らいが



点字の「打ち」にいたるステップ

資料1 多様なコミュニケーションの例 (出典：研究協力校の学校案内)

また、教職員も含めてネームサイン（触覚）を付けている。靴箱には、幼児児童生徒の名前と写真、ネームサインを板に付けた着到板のシステムがある（資料2）。登校時には、靴箱からネームサインを取り出し、出席ボードに張り付け、下校時に戻すものである。着到板によって誰が登校しているかわかる。



資料2 着到板のシステム

3-2. 環境の整備

「重複障害児自立のための建築・設備・環境は①アクセシブル、②わかりやすく、③快適で、④美しくあるべき」という方針のもと、次のような環境が整備されている。

- ・ わかりやすく、安全な環境整備の例としては、裸足で歩いても安全なように、床に傷が

ないか確認していることや、教室と外の境にウッドデッキがあること、玄関がグループごとに分かれていること（資料3）等が挙げられる。



資料3 グループごとに分かれている玄関（左が幼小グループ、右が小学部）

- ・ トイレは教室から廊下に出ることなく直接トイレに行けるように配置されている。綺麗で畑にもあるなど設置数も多い。また、トイレの入り口は目印があり、色と触覚で違いに気付ける（資料4）。資料4のように、男子トイレの入り口には水色の背景に梱包材を、女子トイレの入り口にはピンク色のフェルト生地が貼られている。



資料4 トイレの入り口の目印

各教室の入り口のドアの取っ手には教室をイメージしやすい物を付けてある（例：給食を食べる部屋にはスプーンが、調理実習室にはスポンジが付けてある）。

- ・ ネームサイン（シンボル）は幼児・児童・生徒のロッカーや、机や椅子にも付けてあり、自分の場所がわかりやすくなる（資料5）。
- ・ 目印等はどの学部も同じものを用いる。ネームサインも学年が変わっても同じものを用いる。これらによって、学年が上がり教室が変わっても、わかりやすい環境であり、早く環境に慣れることが期待できる。
- ・ 各教室入り口の教室名の表示板は、身長に合わせて提示位置を変えている。



資料5 わかりやすい教室配置

- ・ トイレ等は、教員が清掃しており、幼児児童生徒への指導の課題や設備の改善点も見える。

3-3. 将来を見据えた指導

グループホームや作業所等の卒業後の環境に移行できるように指導しており、調理の授業など家庭生活を重視している。畑で作った物を調理して食べたり、家庭に持ち帰り褒めてもらったりしている。また、電子レンジや電気ポットも使用して簡単な調理を自分でできるようにしている。調理が様々な教科・学習につながっている。

調理は、表2（観点2-2）に挙げた「盲ろう児の教育活動の組み立ての方針」の「5. 授業では本物を使って、子どもにとって意味のある活動を行う」に該当する活動の一例でもあり、研究協力校では継続して取り組んでいる。

研究協力校の普通部には、高等部専攻科生活科が設置されている。高等部卒業後さらに3年間の教育を受けられる体制が整えられている。生活科を経ることで、グループホームや作業所といった卒業後の環境への適応がよくなっている。

観点4：

障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4. 学院内及び学区の小学校等との交流教育

幼稚部、小学部の幼児児童の中で、交流教育という形で、週に1回、あるいは年に数回の交流教育として、自宅の学区にある保育園、幼稚園、小学校の活動に参加している。

観点5：

多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5. パーキンス盲学校国際部門専門家及び国内研究者との協議

平成29年度は、①PIがもつ盲ろう教育の専門性および研修の資源について把握し、②PIの専門家に横浜訓盲学院および日本の盲ろう教育を紹介し、③課題を整理し、④平成30年度に実施するPIによる研修と研究の内容を検討することを課題とした。

実際に、平成29年度は、PI専門家2名が研究協力校と横浜市立盲特別支援学校・東京都立久我山青光学園の見学を行い、早稲田大学大学院・教授 大藪泰氏、杏林大学病院アイセンター視能訓練士 新井千賀子氏ら国内研究者を含めた研究協議を行った。

PI専門家が日本の状況を見学し協議する中で、見落とししていた盲ろう教育に必要な知識と技術について知見が得られた。さらに、乳幼児期と学齢期での異なるアプローチについて実践的な知見が得られた。これらを総合して平成30年度の研修内容とそれを踏まえた実践研究の内容や方向性について整理した。